

沖縄本部半島頸部の鮮新 - 更新統 - 層序と堆積環境 -

Plio-Pleistocene stratigraphy and sedimentary environment in the Motobu Peninsula, Okinawa Islands

立石 雅昭[1], 山下 阿須佳[2], 大河内 誠[3]

Masaaki Tateishi[1], Asuka Yamashita[2], Makoto Ohkouchi[3]

[1] 新大・理・地質, [2] 新潟大・自然研・地球環境, [3] 新大, 自然研, 生態圏

[1] Dept. Geol., Niigata Univ., [2] Geo- and Biosphere, Grad. Sch., Niigata Univ, [3] Life and Environmental Sci., Niigata Univ.

沖縄島に分布する鮮新 更新統は大きく前期更新世以前に堆積した島尻層群と、更新世中・後期の琉球層群に分けられる。それらの堆積環境については、島尻層群は主に深海～浅海、琉球層群は南部では珊瑚礁石灰岩、北部では浅海～陸域の環境が考えられてきた。しかし、研究の現状としてはなお層序学的にも、堆積学的にも多くの課題が残されている。とりわけ、琉球層群に関連してその石灰質堆積物と碎屑性堆積物の層序的關係、堆積過程に関わって不明な点が多い。ここでは両堆積物の關係を明らかにする目的を持って進められた、中部本部半島頸部の鮮新 更新統の層序と堆積環境に関する研究の結果を TL 年代も含めて報告する。

調査地域の鮮新 更新統は全層厚 100m の主に非石灰質碎屑岩からなるが、一部、石灰岩を伴う。

基盤岩類は四万十累層群国頭層群本部層と名護層に属する(緑色)千枚岩・砂岩・泥岩などからなり、一部石灰岩を伴う。

基盤を不整合におおう島尻層群呉我層は層厚 60m 以上に達し、岩相から下位の古我知部層と上位の親川部層に細分される。古我知部層は千枚岩角礫を主とする礫層と炭質物を含む青灰色シルト層の互層からなり、火山灰層を局所的に挟む。この火山灰層からは $1.68 \pm 0.2\text{Ma}$ の TL 年代、島根大学大平寛人氏による FT 年代で 2.14Ma が得られた。

これらを不整合に覆う全層厚 60m の琉球層群相当層は下位から仲尾次層、中山層、大北層に区分される。各層は下位層を不整合で覆う。仲尾次層は層厚 15m、礫岩、石灰質砂礫岩を主とし、最上部に石灰岩を伴う。中山層(中位段丘堆積物)は最大層厚 20m、河川成砂礫を主とし、淘汰のよい石灰質砂層を伴う。大北層(低位段丘堆積物)は最大層厚 40m、河川成礫層、砂礫層、海成砂層からなり、最上部に石灰岩を伴う。名護市内原の大北層からは $0.59 \pm 0.29\text{Ma}$ 、 $0.51 \pm 0.42\text{Ma}$ 、 $0.45 \pm 0.32\text{Ma}$ という OSL 年代を得た。

本地域の島尻層群並びに琉球層群には網状河川システム、エスチュアリーシステム、ならびに珊瑚礁複合システムが認定される。島尻層群、ならびに大北層の堆積システムの時空的変遷について検討した。それぞれについて低海水準期から海進期への変遷が認められた。